

## アチョリの名前（1）

名前というのは、その国や民族、文化が反映されていて興味深い。筆者が業務しているウガンダ北部アチョリ地域では、ナイル語系諸族が用いるルオ語の系統であるアチョリ語が話されているが、今回はこのアチョリ語の名前をいくつか紹介したい。

アチョリの人々の名前は、基本的にアチョリ名+英語名<sup>\*1</sup>で構成されている。例えば、ニエロ・フィリップは、どちらも名前で苗字はない。このアチョリ名には、日本人の名前と同じようにそれぞれ意味がある。ニエロは「笑顔」という意味であるが、彼は笑いながら生まれてきたらしい<sup>\*2</sup>。他にも肌の色が淡い子が生まれると「白い」という意味で、男子はモノ、女子はラモノと名付けられたり、生まれつき指にイボがある子が生まれると「6本指（多指）」という意味で、男子はオジャラ、女子はラジャラと名付けられる。

出生によって決まっている名前もある。双子の兄姉はオチェン/アチェンで、弟妹はオピオ/アピオである。そして双子の次に生まれた子供はオケロ/アケロであり、さらに次の子はオドン/アドンと決まっている。ちなみに本人が生まれる前に片親が亡くなっていた場合もオドン/アドンと名付けられるらしいのでややこしい。

もう一つ興味深いのは負の意味の名前を持つ人が多いことである。例えば、ニエコは「嫉妬」という意味である。一夫多妻のアチョリでは、その子が他の妻たちの嫉妬を買うことも珍しくないらしい。「呪い」という意味のキラマ、「不運な男」という意味を持つコマケチは、生まれる前後

に家族に不幸な出来事が起きたためにそう名付けられたようだ。もちろん普段の生活で、名前の意味を気にすることはないが、筆者はその名付けの背景が気になったので、友人たちに聞いてみた。

まずアチョリでは子供に名前を与えるのは親族の年長者であり、その子の実親は名前を与える権利を持っていないらしい。それゆえ両親の想いとは関わりなく、負の意味の名前もつけられるようである。加えて、文化人類学的には、アチョリに限らず、文字を持たなかった民族はその時の出来事を記録するために、その時の出来事にちなんだ名前を子供に付けることは珍しくないらしい。このことをアチョリの友人に訪ねたところ「確かにそういう意味合いもあるかもしれない」とのことであった。例えば、コマケチは割とよくある名前であるが、その子の前に生まれた子が亡くなった場合に付けられることが多いらしい。コマケチという名が多いのは、それだけ生まれた子が亡くなることが多いのだろう。一方、「悪霊対策のために、負の意味の名前を用いる」という話はアフリカに限らず世界各国で耳にするが、アチョリ名にはそういった意図はないらしい。

ただ、名前の傾向も時代とともに変わってきているようである。筆者の友人たちの子供もラケ「姫」、オテカ「英雄」など割と明るい名前が多い。コマケチさんの中には、コマグンと自ら改名した人もいる。「幸運な男」という意味らしい。

筆者は業務で2,000人以上のアチョリ名を入力したことがある。最初は単調な作業であったが、一つ一つの名前の意味を教えてもらってからは、名前の向こうに知らない人の顔が見えるような気がして、ずいぶんと楽しんで取り組むことが出来たのを覚えている。

(2022年4月 澤田)

<sup>\*1</sup> 英語名は宗教や著名人、知人の名前などから、比較的自由に付けられる。

<sup>\*2</sup> ほかにも「生まれたときに周りの人が笑顔になった」または「嘲笑」という負の意味もあるとのこと。

## 新・21世紀への道 <その1>

### はじめに

かつて AAINews では、「自然と人間との共生～21 世紀への道」(No.19～24)、「幸せの青い鳥はどこに～あなたの欲しかったものは何ですか？」(No.31～36)と題して、地球環境問題や「豊かさ」や「生き方」等を主要テーマとした2つのシリーズを連載した。

1998～99 年に掲載した「自然と人間との共生」では、「21 世紀に向けての最大の課題の一つは『環境問題』である」として、自然と人間との共生をめざす国内外の事例を取り上げ、文献資料だけでなく、実際に取材あるいは調査に出かけ、我々が考えること、感じたことを記事にした。そして、「途上国援助の現場に身を置く人間として…今後とも、『自然と人間の共生』という考え方を念頭に置いて、国内における共生を目指した様々な活動や、途上国における持続的な開発に取り組んでいきたい」と結んだ。

また 2000～01 年の『幸せの青い鳥はどこに』では、「豊かさ」や「生き方」に着目してシリーズを展開し、「有限の資源と無限の欲望の中で、グローバル化は本当に機能するのか？グローバル化は強者と弱者の格差拡大や環境破壊につながるだけではないのか…」 「人類の果てしなき物質追求と自然の回復能力を遙かに越えた開発をこのまま続ければ、その行き着く先はある程度予想できよう。こうした中で、我々は次世代に対してどのような教育を行い、どのようなシステムを構築して行くべきかを本気で考える時が来ているのではないだろうか」「日本における現在の『閉塞感』は将来に夢が持てないことに関係しているし、その対極にあるものが、希望とか充実感、達成感といったものであろう」と述べた。

これらは 20 年程前「京都議定書」が採択された頃に取り上げたテーマであり、当時すでにグローバル化は進み、地球温暖化が問題となってい

た。一方で、我々が従事する国際協力は、ODA 事業であれ NGO であれ、グローバル化の潮流のなかで少なからず影響を受けてきた活動とみることができる。グローバル化の進展を前提に、国家間の経済・文化交流が活発化し、国際社会の相互依存性が強まってきたのは事実であろう。先進国の責務として、途上国に対して、資金協力や技術協力の諸事業が実施されている。

では、このようにグローバル化が進行する世界のなかで、国際協力を従事する我々は、どのように生き、行動し、進んでいくべきなのであるのか？それを議論したものが前述の2つのシリーズである。そして 20 年が経ち、あれから我々は何に取り組んできたのか？これから何をすべきなのか？いまここで一度立ち止まって考えてみようというのが本シリーズの趣旨である

20 年前と比べて、世界が抱える課題に対する解決への道のりもあまり進んでいないように思われるし、問題はより深刻化しているようにも見える。一方で、地域で行動し、世界に発信していくグローバルという活動が生まれたり、農村回帰の潮流とともに地域や里山が見直されたり、持続的な開発を小学校でも教えるなど、20 年前にはなかった動きが起きているのも事実である。

本シリーズでは、グローバリゼーションや資本主義が課題を抱えている中で、それらに対してこれからの地域づくりのあり方や、持続可能な社会や暮らしについて、我々国際耕種の身近にある事例を取り上げながら、今後の国際耕種の活動のあり方とともに考えてみたい。



マングローブの植林を通じた環境教育活動 (2013 年オマーン国にて)

\*上述のシリーズは AAI の Web サイトからご覧になれます。  
<https://www.koushu.co.jp/aainews/>

## スーダンの有用植物<その2>

### ソルガム

ソルガム (*Sorghum bicolor*) は、スーダンを代表する畑作物であり、トウジンビエとならんで、古くから主穀として栽培されてきた。アフリカ大陸でみると、16世紀の大航海時代ののち、新大陸起源のトウモロコシや北方の地中海起源の小麦など、後発の外来穀物の栽培が拡大し、それまで主流であったソルガムやトウジンビエといった伝統穀物から、徐々に新規作物に置き換えられてきた歴史がある。スーダンにおいても、近年、輸入小麦によるパン食が広がってきているものの、ソルガムやミレットは今日でも伝統的な主食として依然有力な存在であり、一定の生産規模を保持している。特に国土面積の85%強ともいわれる天水農業が主流の非灌漑地区においては、文字どおりの主作物として、住民の生計を支えている。

これまでも AAINews において「ソルガムと天水農業」「集水型農業による牧畜民のソルガム栽培」「ソルガムとコムギの粒食文化」「ソルガム畑に被害をもたらすもの」と題し、ソルガムの歴史的・文化的な側面についてふれてきた。今回、スーダンの「有用植物」を紹介していく本シリーズの初回で改めてソルガムを登場させわけは、この作物の将来的な可能性と課題に焦点をあててみたいと考えたからである。

上述のとおり、ソルガムは天水依存の非灌漑地区で栽培されることから、粗放的に栽培されるイメージが強いが、実はナイル川近辺の灌漑地区においても夏の飼料作物としてよく栽培されている。ナイル川沿いの農家は、冬期(10~4月)の作物生産に、ヒツジ・ヤギ・ウシ等の家畜飼養を組み合わせる農牧複合経営であることから、家畜飼料の確保は重要な仕事である。灌漑地区のソルガムは、アブーサバイン(サバインはアラビア語で70日の意味)という早生品種が選択され、穂実・茎葉すべてが飼料として利用されている。また、通常、作物生産は冬期に集中し、暑さが著しい夏期(5~9月)は作物にとっての「死の季節(dead season)」と呼称され、栽培がさけられる

傾向にあるが、そのなかでも飼料用ソルガムは高収量で安定的に作付けできる貴重な夏作物として、栽培されてきた実績がある。

また、灌漑地区の夏期栽培は、近年、飼料用ソルガム以外にも、ゴマ、ラッカセイ、ヒマワリ、ダイズ、イネなど市場性の高い換金作物を積極的に導入する試みが行われているが、筆者は、これらに加えて、食料用ソルガムも新規換金作物としての可能性もあると考えている。これまで食料用ソルガムは、他の換金作物と比較すると、優位性が低いと考えられ、作付けは非灌漑地区での伝統的な粗放栽培と相場が決まっていた。ただスーダンの通貨安による経済情勢悪化や将来の気候変動による食糧事情を考えると、輸入依存性が高く供給が不安定で、かつ冬作栽培適地が限定的である小麦の代替作物として、主食となる夏作食料用ソルガムの見直しがあってもよいであろう。

加えて、冬期と比べ、夏期の灌漑地区の作付面積は圧倒的に少なく、空閑地が多いことから、土地の利用効率を高めていくという点でも、食用ソルガムの作付けは有効だと考えている。そのためには食用ソルガムの高度利用に向けた、近代的な製粉加工技術の導入、高付加価値化、流通網の改善など包括的な取り組みが求められる。スーダンの研究機関でも、小麦粉との混合利用による製パンの研究も開始されており、小麦の輸入代替として、現地でも着目されている。このように、スーダンの暑い夏に適應した作物としてソルガムの積極的な活用の可能性はもっと追究してもよいのではないかと考えている。



飼料用早生品種のソルガム「アブーサバイン」の夏栽培(左)と飼料用ソルガムの取引(右)

## 農園を訪ねて<その3>

### 育苗・接木苗専売農場(飯泉農場)

日本の農園を紹介する不定期シリーズの3回目は茨城県つくば市にある野菜接木・自根苗の生産販売を40年以上にわたり営み、国際耕種が業務委託実施するJICA 筑波野菜栽培技術コースにおいて永らく研修視察見学先としてお世話になっている飯泉農場を紹介する。

飯泉農場における苗生産販売は40年以上前に現農場代表飯泉恵生さんの祖父が始められて以来の歴史を持ち、飯泉さん御自身も会社勤めを経て家業を引き継がれてから20年を優に越える経験を持っている。

ご自身の地所に苗木生産専用トンネルハウス(10アール)数棟、育苗温床用給湯システムと加温機、また土壌消毒用可動式蒸気ボイラおよびコンテナなどを所有され、2月生産開始から5月連休明け頃終了の販売期間に、ご家族および雇用者により接木・自根苗合わせて凡そ40,000鉢を生産している。スイカの接ぎ木作業の場合、穂木・台木準備(切出し)、接ぎ(接合)、植え戻し(鉢植)を二名ずつ計6人で1チームとして作業すると一日で1,000鉢は接げるとのことです、その流れ作業の速さ正確さには目を見張る。



飯泉農場の野菜苗直売所

取扱い品目(作目)は果菜類でトマト、ナス、ピーマン、トウガラシ、スイカ、メロン、キュウリ、かぼちゃ他ウリ類の接木また自根苗を場内で直接販売している。近年は近隣のホームセンターなどでも取り扱われている様子だが、高い技術力に支えられた接木苗の品質などはその違いが一目瞭然である。

盛期は近隣の生産者が1,000鉢(株)単位で購入

していたとも聞くが、高齢化も相俟って近年は専業でも50~100株、一般家庭での自家菜園面積の株数の売上げがほとんどなくなってしまっている。その様な中でも高い技術力による“健苗”を求めて旧知の生産者から、また噂を聞いた近郊の一般消費者、また農業資材店(種苗小売店)などからの引き合いも常に一定数在るとのことだった。



スイカの接木作業

作目、品種、数量などの生産計画はこれまでの実績をもとに決定する。たまに新奇な品目・品種にも挑戦するが、翌年には定番に落ち着くとのことである。

2月~5月の短期決戦の苗生産・販売後はご自身でも野菜生産も行うが主力はやはり苗生産との事であった。

研修コースでも「苗半作」に表される育苗の重要性や低環境負荷の病害防除方法としての接ぎ木技術の理解修得を実習課題にしているが、訪問時に我々コース研修員にも気軽に接ぎ木体験させて頂くなど有難い機会を提供頂いている。

近年は息子さんが生産および経営に参画され、お子さんの笑い声と共に明るい雰囲気を漂わせていた。量販店の台頭などもあるが、高品質な接木苗の量産体系を含む技術の保存の為に農場の継続発展を願うものである。



飯泉農場で接木作業に挑戦する野菜コースの研修員

\*写真は2019年撮影、情報は2021年時のもの